

霞

—2019年度冬季展示室だより—

土浦市立博物館
令和2年1月5日発行(通巻第49号)

当館では「霞ヶ浦に生まれた人々の暮らし」を総合テーマに、春(5~6月)・夏(7~9月)・秋(10~12月)・冬(1~3月)と季節ごとに展示替えを行っております。本誌「霞(かすみ)」は、折々の資料の見どころを紹介するものです。展覧会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

古写真・絵葉書にみる土浦(49)

古写真「櫓門前での記念写真」



明治17(1884)年以前に撮影された土浦城です。櫓門の前には、散切頭に袴姿の男性たちがみえます。

左手奥にはわずかに本丸館の屋根と玄関が、右側の松の向こうには東櫓と鐘楼が確認できます。鐘は現在等覚寺(土浦市大手町)にある銅鐘(国指定重要文化財)です。明治17年3月の火事で本丸館は焼失し、東櫓も取り壊されました。

【情報ライブラリー検索キーワード「城址と公園」「土浦城」】

目次

- 古写真・絵葉書にみる土浦(49)・・・1
- 博物館からのお知らせ・・・1
- 【館長講座及び展覧会と催し物等】
- 好敵手は色川三中(近世)・・・2
- 建て替えられた本丸館(近世)・・・3
- ラベルの貼られた醤油瓶(近代)・・・4
- 水害の土浦を語る(近代)・・・5
- 市史編さんだより・・・6
- 土浦藩土屋家の横顔・・・7
- 霞短信「“日本初”文化施設コラボネットTVで情報発信」・・・8
- コラム(49)・・・8
- 情報ライブラリー更新状況・・・8

博物館からのお知らせ

★★糸賀茂男の館長講座★★

1月26日(日) 『将門記』と平将門～ミヤコとヒナの対立』

2月23日(日) 「平将門の乱(Ⅰ)～新天皇の即位とは?」

3月29日(日) 「平将門の乱(Ⅱ)～日本社会の秩序を再考する」

※申込多数につき抽選で受講者は決定していますが、受付にて受講者以外の方にも講座資料配布(要コピー代)や音声記録の貸出しを行っています。

★★昔のくらしの道具★★ 11月16日(土)～3月8日(日)

小学3年生の校外学習に合わせ、昔の人が使ったくらしの道具を紹介します。

★★博物館のひな人形★★ 1月5日(日)～3月8日(日)

博物館所蔵の、江戸時代後期から大正時代のひな人形を飾ります。

★★はたおり作品展★★ 2月22日(土)～3月1日(日)

はたごしらえ講座受講生とはたおり伝承グループ「綿の実」による作品展です。綿の種とり体験やはたおり体験もできます。

★★第41回特別展「土浦城—時代を越えた継承の軌跡—」★★ 3月14日(土)～5月6日(水)

中世に登場し、時代とともにその役割を変えながら存続してきた土浦城の様相と、継承の軌跡をご紹介します。

◆記念講演会① 日時：3月22日(日) 午後1時30分～3時 会場：視聴覚ホール(定員70名)

「山本菅助と土浦城(仮)」

講師：海老沼真治氏(山梨県立博物館学芸員)

◆記念講演会② 日時：4月19日(日) 午後1時30分～3時 会場：視聴覚ホール(定員70名)

「城址の公園整備と土浦城(仮)」

講師：野中勝利氏(筑波大学教授)

※上記のほか館長特別講座や史跡めぐりなどを予定しています。関連イベントの詳細はお問い合わせください。

★休館のお知らせ★

・毎週月曜日(1/13、2/24を除く)

・1/14(火)

・2/12(水)、25(火)

・3/10(火)～13日(金)

※展示替え期間のため。

・3/24(火)

★祝日閉館します★

・1/13(月)成人の日

・2/24(月)天皇誕生日(振替休日)

・2/11(火)建国記念の日

・3/20(金)春分の日

★展示準備作業のため無料閉館します★

・3/7(土)、8(日)

※ただし、展示室3は閉室中です。



博物館マスコット
亀城かめくん

※お知らせ欄の行事・日程は、一部変更となる場合があります。

こうてきしゅ いろかわみなか
好敵手は色川三中

ながしまやすのぶしょうぞう
—長島尉信肖像—

机に肘をつき、何か考え込んでいるのでしょうか。真剣な表情をしているのは長島尉信（1781～1866）です。机上には古代の法律書『令義解』と尉信の著作『瓶囊拙工』が置かれています。肖像は天保6（1835）年、関西旅行の途中で尉信の家に滞在した、仙台藩の儒者小野寺鳳谷（1810～66）によって描かれました。鳳谷は、尉信の学問の苦悩を知る親しい友人でした。

尉信は、通称を治左衛門といい、土浦藩領常陸国新治郡小田村西町（現つくば市）の小泉家に生まれ、小田村田向の名主長島家の養子に入りました。45歳で名主を隠居したのち、江戸に出て算法や暦法、度量衡などを学び、その力量を評価され、水戸藩、続いて土浦藩に藩士として仕えました。

尉信の友人であり、学問上の好敵手であったのが色川三中（1801～55）です。二人が初めて会ったのは、文政13（1830）年閏3月6日、三中が友人の木原荷亭、入江素行らと小田村の尉信宅に立ち寄った時で、尉信50歳、三中30歳でした。

尉信には「負喧談」「田法大意」など、土地制度に関する著述がありました。三中はその内容に疑問を抱き、尉信の論拠を検証するため多くの古文書や典籍を研究しました。

嘉永7（1854）年、土浦町の検地（土地の測量）の施行を主導した尉信に対し、三中は「検地を行うべきではない」と唱えました。検地をして正しい年貢を払うべきだとする尉信と、江戸時代初期の検地で負荷された年貢はそもそも重く、以降の生産力向上は農民の恒常的な努力の賜物であるから再検地はすべきではないとする三中。二人の論点はその1点にありました。

三中は「長島翁は自分の学問を活かそうとしているが、私は翁の学問は正しくないと考える」（弘化4（1847）年・『野中廻清水』第一巻「田制又」）と書いていましたが、のちには「長島翁の田法書は天下の巨害」（嘉永7年10月2日・「片葉雑記 三」）と表明するようになりました。色川三中研究の泰斗、中井信彦は、三中の国学研究が古典の校合や比較検討から田制史の研究へと転換した契機は、領主の過剰な年貢収奪を許してはならないという検地の可否にあったといい、尉信が三中に与えた影響の大きさを指摘しています。考え込む尉信の肖像は、まさに三中との論争に悩んでいる、その姿かもしれません。

（木塚久仁子）



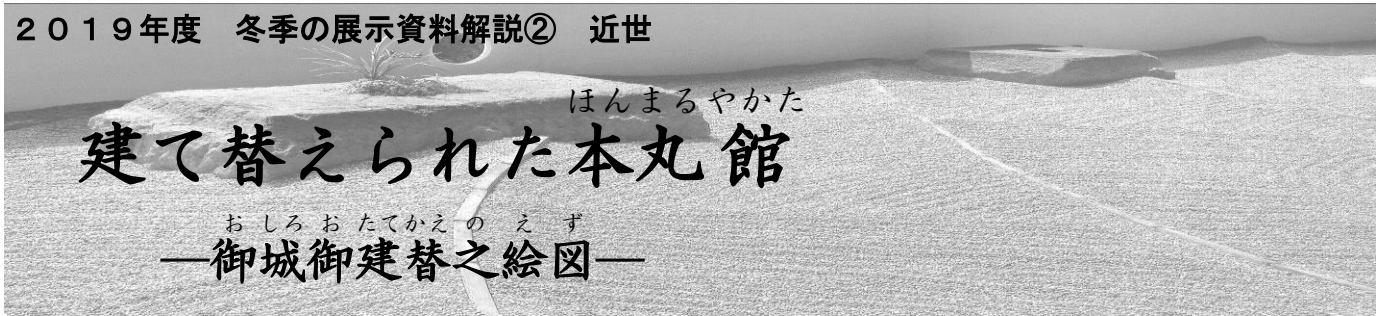
長島尉信肖像（当館所蔵）

2/8（土）11時・14時からこのページで紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください（いずれも近世コーナーに展示）

- 色川三中「辛亥」嘉永4年7月（当館所蔵）
- 色川美年「家事記 廿五」安政2年3月（当館所蔵）





建て替えられた本丸館

おしろおたてかえの えす
—御城御建替之絵図—

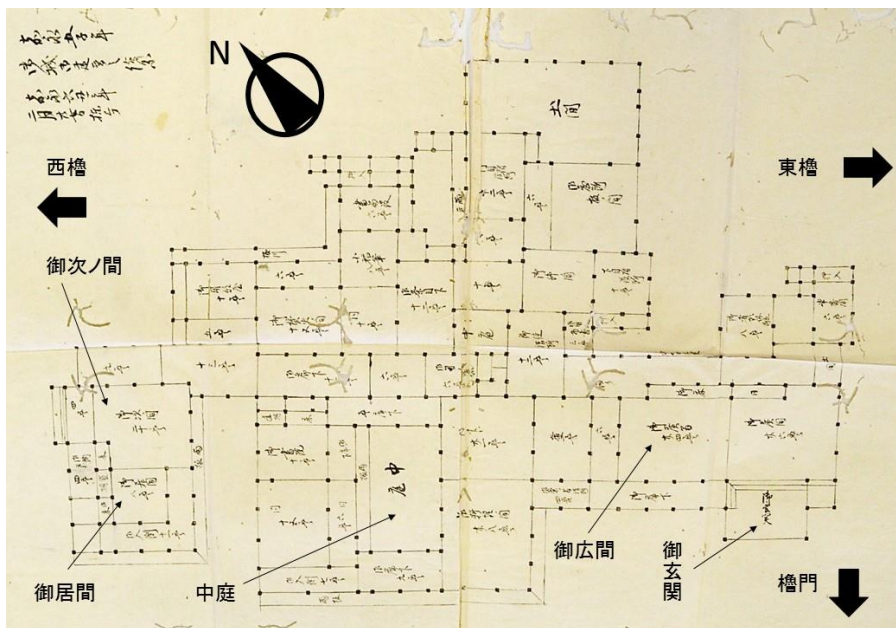
土浦城本丸館は、江戸時代の初めころには整備され、主に儀式や行事など藩の公的な活動を行う場であったと考えられています。残念ながら明治 17 (1884) 年の火災によって焼失してしまったため、現在その姿を見ることはできません。しかし、現存するいくつかの絵図や古文書を紐解くことにより、その姿が少しずつ明らかになってきます。今回ご紹介する本丸館絵図 (写真左) もその一つです。

絵図の左上をみると「嘉永五子年御城御建替之絵図 嘉永六丑年二月廿七日棟上ケ」と記されています (写真右)。このことから、土浦城本丸館は嘉永 5 (1852) 年に建て替えられ、翌年に棟上げとなったことが分かります。上棟式もこの時に行われたのでしょうか。これまで土浦城本丸館については、江戸時代を通して建て替えられたことを示す記録はないと考えられていました。しかし、この絵図の存在により、江戸時代末に建て替えを行っていたことが明らかになりました。残念ながら建て替えが行われた背景については、現在のところ明らかにはなっていません。

本丸館の間取りについても見ていきましょう。玄関は、櫓門に近い南側に設けられていたようです。玄関を上ると二間続きの「御広間」があります。この部屋は、藩の儀礼などの際に用いられていたようです。広間や廊下を抜けると「中庭」と書かれた場所があり、その奥に向かうと「御次ノ間」、そして「御居間」があります。居間は藩主がいる場所でした。藩主は主に江戸で生活をしていましたが、年に一度は土浦に戻ってきました (「土浦在城中覚日記」より)。その際、家臣が藩主と謁見をする場がこの居間でした。

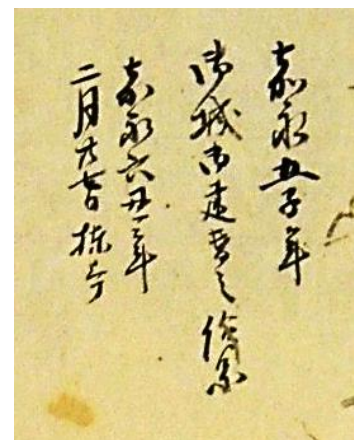
土浦城址内に現存する建築物は櫓門・霞門・前川口門 (移築) のみで、江戸時代当時の姿を目にすることはできません。しかし遺された資料を手掛かりにして、土浦城の歩んだ足跡をたどることができるのです。

(西口正隆)



本丸館絵図 (当館所蔵)

本丸館建て替えの記述
(絵図内左上より)



1/25 (土) 11時・14時からこのページで紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください (いずれも近世コーナーに展示)

- 本丸館絵図 (個人所蔵)
- 鉄黒漆塗五枚胴具足 (当館所蔵)



しょうゆびん
ラベルの貼られた醤油瓶
— いろかわさぶろ べえけ
— 明治時代の色川三郎兵衛家 —

明治時代の土浦は霞ヶ浦及び利根川水運の物資の集散地として栄え、千葉県ちやうしの野田や銚子とともに江戸時代から続く醤油醸造業しょうゆじやうぞうぎやうの盛んな土地の一つでした。

かつての醤油醸造業の様子を示す資料として、今回ご紹介する陶製の醤油瓶とうせいがあります。同様の醤油瓶に、平成27(2015)年9月1日発行『広報つちうら』掲載の「未来への伝承No.126」で取り上げたものがあり、ラベルのない醤油瓶こくいんの刻印などから、明治時代中頃の土浦の醤油醸造業について述べました。今回の醤油瓶は、当時の最新の印刷技術で作成されたラベルが残るもので、使用当時のままの姿を私たちに示してくれています。

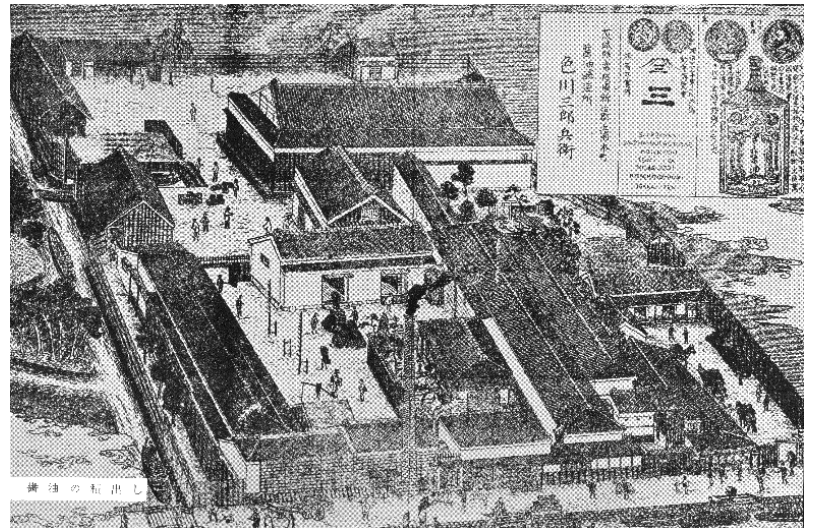
醤油瓶びぜんやきは備前焼(岡山県備前市付近で生産)の角徳利かくどくりと呼ばれる容器を利用した、高さ24cm前後のもので、大小2種があります。それぞれの瓶に、東京で印刷業を営んだ彫刻社ちやうこくしゃによるラベルが貼られています。正面に「さしみ醤油」「色川三郎兵衛製造」の文字と「JAPANESE SAUCE」「GOLD MEDAL」などの英語表記もあります。側面のラベルには「さしみ醤油」の用法や特徴が解説されています(写真左)。

この醤油瓶を用いたのは、土浦の本町ほんまち(現中央1丁目)に醸造所を構えた色川三郎兵衛家(写真右)でした。色川家は江戸時代から明治37(1904)年まで代々醤油醸造業を営み、土浦で有数の生産高を誇りました。「GOLD MEDAL」と記されたラベルには、「AMST(以下欠失)」「(欠失)83」の文字も見え、明治16(1883)年にオランダのアムステルダムで開催された万国博覧会(植民地産物及一般輸出品万国博覧会)に「さしみ醤油」を出品し、金牌きんぱい(メダル)を受賞したことを伝えています。

明治時代中頃の色川家では、通常の醤油とは別に原材料と仕込み時間を贅沢に費やした「さしみ醤油」を製造していました。ラベルの貼られた醤油瓶は、西洋人の食の嗜好と西洋化を望む国内富裕層を意識した特別な醤油の容器であったと考えられます。(関口 満)



ラベルの貼られた醤油瓶(個人所蔵)



色川三郎兵衛家の醤油醸造所(『図説土浦市史』より)

2/22(土)11時・14時からこのページで紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください(いずれも展示室3に展示)

- 色川三郎兵衛家の醤油醸造所(写真パネル)
- 『広報つちうら』「未来への伝承No.126」(写真パネル)



水害の土浦を語る

—新聞記者がみた昭和13年の大洪水—

近年、各地で大規模な水害が頻発^{ひんぱつ}しています。報道を見聞きする機会が増え、私たちにとって水害は、いつでもおこりうる身近な災害になってしまったと感じます。

近世から近代にかけての土浦では、毎年のように大小の洪水がありました。桜川の氾濫^{はんらん}や霞ヶ浦の逆水^{ぎやくすい}（利根川の洪水が霞ヶ浦に流れ込むこと）のために町は浸水し、大きな被害もたらされました。これにより、桜川の堤防改修、霞ヶ浦の逆水対策としての日本鉄道土浦線（現常磐線）の湖岸寄りへの敷設、川口川閘門^{こうもん}の設置などの対策がなされてきました。明治43（1910）年にも大洪水が発生してはいるものの、頻度や規模は軽減されていたようです。

しかし、水害が過去のものになりつつあった昭和13（1938）年、またしても大洪水がおこりました。6月28日から30日にかけての台風接近に伴う激しい降雨によって水が桜川堤防を越え、さらに霞ヶ浦の逆水も重なり、市街地に約1ヶ月も滞水する事態となりました。この時の新聞報道を中心に1冊の記録としてまとめたのが『水害の土浦を語る』（伊沼書店出版）です。

本書を著した市村壮雄^{そういち}（1903～75）は、当時いはらき新聞（現茨城新聞）の土浦支局長をつとめていました。内容の半分は新聞記事を採録したもので、いはらき新聞をはじめ、東京日日・東京朝日・読売各紙の鬼気迫る見出しが並びます。食糧と飲料水の不足は「餓え迫る二万町民」「水の中に水を求む」「茶碗一杯の水の生活」などと伝えられました。「水魔に呑まれた土浦町」「水地獄」などの衝撃的な文字も並びますが、近年の水害報道を鑑^{かん}みれば、決して大げさではないように思われます。

市村は、新聞・ラジオ・ニュース映画で大きく報道された背景には、土浦町に在住する各新聞社通信部員の奮闘があったとし、「ありのままを如何に正確に報道しても新聞記事には多少のおまけがあると見ていた一般（の人※編集補）が上野土浦間の常磐線開通で二日午後見舞に飛んで来て、新聞記事以上の惨状^{さんじょう}に驚愕^{きょうがく}したのも話の種になっている」とも述べています。

桜川の大改修が治水百年の大計である^{ちすい}と述べる一方で、市村は20年もの間町民の大半が水難を経験しなかったことから、桜川への油断や水への警戒不足が被害を大きくしたのではないかと指摘しています。「今後何十年、何百年後にはこれ以上の大水害がなきにしもあらず、油断は禁物である」という市村の言は的^{げん}を射^まっています。市村が本書をまとめたのは、水害発生から約3ヶ月後の、災害が記憶に新しい時期でした。

（野田礼子）



水害の土浦を語る

（昭和13年、当館所蔵）

2/15（土）11時・14時からこのページで紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください（いずれも近代コーナーに展示）

- 洪水写真絵葉書 明治43年（当館所蔵）
- 洪水写真絵葉書 昭和13年（当館所蔵）

※『土浦の洪水記録』（平成21年、図書閲覧コーナー）もあわせてどうぞ。



市史編さんだより

土浦の歌人御田寺河月と歌会始

「歌会始」は文字通り和歌を披露しあう「歌会」のうち、その年の始めに行うもので、宮中では新年の儀式のひとつでした。

宮中における「歌会始」は新年の儀式の一つでもあります。古くは「歌御会始」あるいは「御会始」と称され、新年の制となるのは文明 15（1483）年以降の事です。毎年開かれるようになったのは明治 2（1869）年以降のことで、この年明治天皇は、華族・官員に詠進（歌を献上すること）を許可し、1月24日「第一回歌会始」を開きました。明治 12 年には明治天皇・昭憲皇后両陛下の臨席のもと、一般国民の詠進歌の中から選歌が披講（読み上げたり、節をつけて歌うこと）のうちに加えられるようになりました。詠進歌の選考は、宮内省に置かれた御歌所が行っています。さらに明治 15 年には、天皇の御製・一般国民からの詠進歌が官報や新聞で発表されるようになりました。詠進は皇族・華族・官員のみから一般国民まで拡大し、「歌会始」は上流社会の儀式から一般国民が参加のできる文化行事へと変化を遂げ、現在まで続いています。

今回は明治期にこの「歌会始」に詠進したひとりの歌人を紹介したいと思います。それは「御田寺河月」という人物で、博物館の活動の一つである古文書目録の作成を通じて見つけた歌人です。既に刊行された『土浦市史資料目録 二十三集』の中によく登場していますので、手にされた方はご存じかもしれません。

河月の生まれた御田寺家は、代々名主や戸長などを務めていました。河月は当時武兵衛と称していましたが名主であった父・御田寺儀右衛門の病死（文久 3 年）後、名主（明治 4 年からは戸長）を申し付かり家名である御田寺儀右衛門と改めました。明治 13 年に免役となるまでは地租改正に伴う調査などに励み、隠居を機に法雲寺（土浦市高岡）の先住小田靈戒（号珂月）の門に入り、和歌の号「河月」を授かります。「筑波山百首・桜川同・霞ヶ浦同・東京同・吉野山同」、「近方八景」（旧新治村の名所）、「山王近回・桜川北方・土浦近在八景」などの和歌集と、そこに収録された 1300 首を超える沢山の和歌とを残しています。

河月は天皇陛下歌御会始に継続的に詠進しており、その業績が認められて、明治 39 年 12 月、「大日本歌道奨励会員」に迎えられています。

写真は明治 38 年 1 月 2 日に東京の宮内省御歌掛（御歌所）に提出した河月の歌の下書きです。

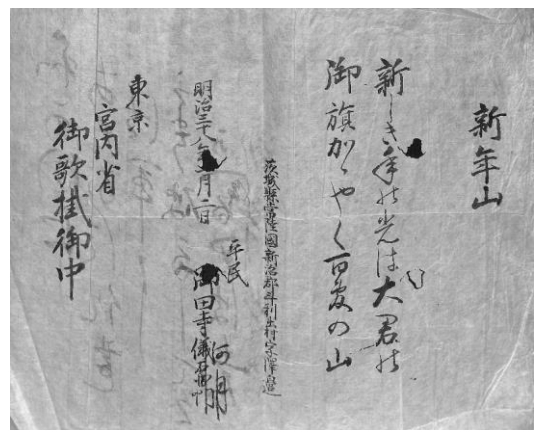
「新年山 新しき年の光は大君の御旗かやく百敷の山」

既に刊行されている『家事志 第一～六巻』をはじめ、色川文庫等にも多くの和歌が含まれています。江戸時代、限られた社会の人々の交流の中で詠まれた和歌の世界が、明治期になり庶民の間へも広がっていきました。

和歌というひとつの視点からも、当時の交友関係や文化等を垣間見ることができます。

元号が令和となり初めての歌会始（御題「望」）が間もなく開かれます（例年 1 月 10 日前後※編集補）。令和という新時代を迎え、皇室をはじめ一般の方々からも沢山の和歌が詠進されることと思います。どのような和歌が詠まれ、選定されるでしょうか。この年の始めに身近な題材で一首詠んでみるのもよいのではないのでしょうか。

（市史編さん係囑託 國枝文江）



高岡 御田寺家文書(史料番号 685)

土浦藩土屋家の横顔

このコーナーでは、土浦城を200年治めた土屋家の歴代藩主を、系譜を読み込みながらご紹介します。

基本的には「土浦土屋家系譜」(『茨城県史料 近世政治編III』所収)を用い、『寛政重修諸家譜』で補足しました。引用はゴシック体で示しています。()は筆者補筆です。



その四、土屋篤直【つちや あつなお】

左門 能登守 従五位下

母は某氏。

享保十七年生る。(安永)五年五月二十日卒す。年四十五。厳性遵義本覚院と号す。

室は奥平大膳大夫昌成が女。

遺領を継ぐ 享保十七年生る。十九年三月九日遺領を継。時に三歳。

土屋篤直(1732~76)は土浦藩土屋家4代当主です。父陳直は3代当主を務めていましたが、享保19(1734)年正月16日に40歳で亡くなってしまいます。陳直には男子が3人、女子が5人の子がいましたが、長男^{くめごろう}彗五郎は早世していたため、次男の篤直が数え年にしてわずか3歳で家督を継ぎました。

将軍に御目見えをする (延享4年)九月十五日はじめて惇信院殿にまみえたてまつる。

この日家臣二人御前に入る。これよりのち例とす。

延享4(1747)年、16歳の篤直は初めて9代将軍徳川家重^{いえしげ}(諡 惇信院)に御目見えをしています。「土屋系図」によれば、この時太刀一腰・紗綾五卷・金(馬代として)を献上しています。同じ時に家臣2名も御目見えをしており、篤直同様に1名ずつ太刀と銀(馬代として)を献上しました。土屋家ではこれ以降、御目見えの際には、当主に家臣2名が随行することが慣例となったと、『寛政重修諸家譜』に記されています。

寺社奉行に就任 宝暦十年正月二十八日奏者番となり、明和六年十月朔日より寺社奉行をかぬ。

安永二年八月二十三日、先に評定所災にかかるののち、私邸をもつて仮の評定所とせしにより時服六領を賜ふ。

篤直は宝暦10(1760)年に幕府の儀礼を補佐する奏者番^{そうしゃばん}に就任すると、明和6(1769)年には寺社奉行にも就任しています。寺社奉行は町奉行・勘定奉行とともに三奉行と称されました。このうち最上位に位置するのが寺社奉行であり、町奉行・勘定奉行が旗本から選ばれる一方、寺社奉行は譜代大名の中から選ばれました。また町奉行・勘定奉行は老中支配である一方、寺社奉行は将軍直属でした。安永2(1773)年には、災い(※「江戸幕府日記」「徳川実紀」には「災」の記述はなく、詳細不明)のかかった評定所^{ひょうじょうしょ}に代えて土屋家の私邸を仮の評定所とした功績により、幕府から時服(春・秋または夏・冬の2季に将軍などから賜る衣服)6領を賜っています。

篤直は宝暦6年から8年にかけて土浦滞在中の日記を記しています。これらの日記は「在城中覚日記」と題され、現在は国文学研究資料館(東京都立川市)に保管されています。このほか、宝暦8年には江戸・千住付近から土浦城下・中貫宿^{なかぬきじゆく}までを描いた絵巻「土浦道中絵図」を遺しました。(西口正隆)

このコーナーでは、博物館活動に関わる方々の声やサークル活動の記録などをお伝えしております。

今号は、土浦市立図書館館長の入沢弘子^{いりさわひろこ}さんに寄稿していただきました。

“日本初”文化施設コラボのネットTVで情報発信

昨年4月、土浦市で“日本初”の市の文化施設連携の情報発信がスタートしました。「つちうらカルちゃんねる」と名付けた番組形式の動画で、インターネットで毎週配信しています。当市には市立博物館をはじめ、上高津貝塚に考古資料館、土浦駅前には市民ギャラリーと市立図書館と4つの文化施設があります。

市民ギャラリーと市立図書館が入居する複合ビル・アルカス土浦は平成29年秋にオープンし、翌年春に土浦駅に完成したプレイアトレと相乗効果を発揮し、高校生や若い家族連れで活況を呈しています。この駅前の賑わいを中心市街地経由で市立博物館周辺や上高津貝塚周辺へも波及させ、各施設の新規来館者の獲得を目的に「つちうらカルちゃんねる」は始まりました。

現代の生活者、特に若年層の情報収集手段としてインターネットは年々重みを増しています。新規来館者のターゲットには若年層も含まれるため、ネットTVを利用した情報発信は適しているのではないかと考えます。これを既存の媒体と併用し、情報到達度を向上させていくねらいです。

番組には4館がリレー方式で出演し、企画展の概要や収蔵品紹介、イベント告知などを行っています。リアルタイムよりアーカイブを視聴する傾向が強く、視聴回数の増加に手ごたえを感じています。これからも「つちうらカルちゃんねる」では、歴史と文化のまち土浦のプライスレスな魅力を発信します。ぜひご覧ください。

(土浦市立図書館館長 入沢弘子)



「つちうらカルちゃんねる」冒頭シーン

【番組名】「つちうらカルちゃんねる」

【放送日時】毎週木曜日午後3時～(15分間)

【番組リンク先】

<https://www.youtube.com/vchannelibaraki>

コラム(49) 博物館で語り継ぐ「戦争体験」とは

2019年8月7日開催の「戦争体験のお話をきく会」は、御年90歳の野田信次^{のぶじ}さんに「東京での空襲体験・海軍での仕事」と題し、17歳当時の記憶を語っていただきました。

野田さんは、聞き取り調査への協力者の一人です。2019年3月に報告書『土浦のひとと暮らしの戦中・戦後』を刊行したことで、平成27年度から当館で取り組んできた聞き取りは一つの区切りを迎えました。この間にも何人かの方が鬼籍^{きせき}に入られ、当時の体験談を聴くことは、いっそう困難な状況になりました。

今回、「お話をきく会」では初めての試みとして、野田さんのお話のあと、当時の服や道具にふれる体験の時間を設けました。資料の安全性に配慮しつつも、博物館員・参加者同士が自由に話をしながらモノにふれることで、ともに当時に思いを致すひとときになりました。

いずれ、戦争を直接体験した方々はいらっしやらなくなるでしょう。博物館を、モノを通して、世代を超えて戦争体験を語り継げるような場にしてゆきたいと考えています。(野田礼子)

情報ライブラリー更新状況

【2020・1・5現在の登録数】

古写真 599点(+1)

絵葉書 511点(+1)

※()内は2019年10月1日時点との比較です。展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは画像資料・歴史情報を順次追加・更新しております。1ページでご紹介した古写真・絵葉書もご覧いただけます。

霞(かすみ) 2019年度

冬季展示室だより(通巻第49号)

編集・発行 土浦市立博物館

茨城県土浦市中央1-15-18

TEL 029-824-2928

FAX 029-824-9423

<http://www.city.tsuchiura.lg.jp/section.php?code=43>

1～5ページのタイトルバック(背景)は、

博物館2階庭園展示です。

2019年度冬季展示は、2020年1月5日(日)～3月6日(金)となります。「霞」2020年度春季展示室だより(通巻第50号)は2020年5月12日(火)発行予定です。次回の来館もお待ちしております。

※展示室だより「霞」は、当館ホームページからもご覧になれます。(カラー版)